

1本の糸に複数色も可能

繭のまま 絹糸染色

大間々のニット会社が新技術

絹糸を繭の状態で染色する新技術を、大間々町のニット製造販売会社が開発した。複数の色の繭で、1本の絹糸をひけるようになり、これまでにない深い色合いの糸が試作品として完成した。県繊維工業試験場の笠原力主任研究員は、「染色の常識を覆す発明。服飾業界を驚かせる新しい糸だ」と高く評価している。

「常識を覆す発明」

絹糸は表面がセリシン、中心部はフィブロインという二種類のタンパク質で構成されている。従来は繭を糸にした後、「精練」の過程でセリシンを全て落とし、フィブロインに染色している。新技術を開発したのは大間々町の「ミラノリブ」(笹口晴美社長)。独自の染料と、染色技術を用いることで、表面のセリシンを通過し、中心部

部のフィブロインを染めている。このため、繭のままでも内部まで染料が浸透できるようになった。染料の成分や染色方法などは、すでに特許の出願を済ませている。

一本の絹糸は、十〜三十個の繭の糸をより合わせて色合いはさまざまに変化して見える。繭の色の組み合わせを変えれば、糸の種類の無限に広がる。糸一本の中に、虹の七色を組み込んだり、さらには二十色、三十色と増やすことも可能だ。

新技術の効果は、色だけでなく多方面にわたっている。セリシンを残した絹の布は、絹本来の光沢を持ち、堅さを残した独特の質感がある。紫外線をカットする効果も確認され、県蚕業試験場と共同で、効果を高める研究が進められている。

ミラノリブの笹口社長は「新技術で絹の製品開発の世界が大きく広がってほしい。若い人も希望を持って携われる絹産業をつくりたい」と話している。



新技術で染めた繭と、試作品の糸、布を紹介する笹口社長